世界の登山記録2017～2018

池　田　常　道（日本山岳会会員）

第１部　2017年度のおもな登攀記録

1－1　ネパール/チベット

エヴェレスト（8,848m）

西稜肩から北壁を経てローツェ（8,516m）への無酸素縦走を狙っていたウエリ・シュテック（40）が４月30日、ヌプツェ北壁で順応行動中に滑落死した。パートナーのテンジ・シェルパ（24）が凍傷を負ったため、シュテックは単独で行動していた。彼は2013年春に、シモーネ・モーロ（イタリア）らと３人でこの縦走を狙ったが、公募隊シェルパのリンチに遭って負傷、断念。懸案となっていた。

春シーズン最初の登頂は５月11日、チベット側から行われた。チベット人チームが8,300mまでルート工作したのを受けて、インド隊のシェルパ９名が頂上までフィックス。ルーマニアのホリア・コリバサヌは、混雑を嫌ってこの一団に先行し、8,300mから12時間で頂上に立った。インド隊をオーガナイズしたアルン・トレックス社は、その後クライアント６名とシェルパ10名を頂上に送り、この成功を亡きシュテックに捧げると発表した。

アイスフォールの雪崩事故と大地震で２年空白が生じたネパール登山が再開されて２年目、ネ政府は史上最高の375の登山許可を出した。チベット側の数字は明らかではないが、南北合わせた登頂者はシェルパを含めて約700名に及ぶとみられ、延べ人数は8,000を超えた。ネパール側では頂上までのルート工作を請負ったシェルパ・チームが強風に行き悩み、15日にようやくルートが開通。その夜から公募隊による登頂ラッシュが始まった。しかし翌早朝、先頭を切ったティム・モーズデール（英）らが発見したのは、一部が崩壊したヒラリー・ステップだった。標高8,790mにあるステップは高さ約12mの段差で、稜線が狭いため登り下りの順番待ちが起こり、しばしば渋滞の原因となってきた。崩壊は2015年の大地震によって引き起こされたとみられるが、前年ここを通過した登山者から報告はなかった（聖なる山の歴史的構造物の消失という情報発信をネ政府が禁じたとも言われている）。

新記録といえるのはチベット側からスピード登頂を目ざしたキリアン・ジョルネ・ブルガダ（スペイン、29）だけになった。彼はチョー・オユー（8,188m）の頂上台地を往復して順応を済ませ、その足でエヴェレストに入山。５月20日に旧ロンブック僧院近くのBC（5,100m）を出て26時間で登頂したが、6,500mのABCまで下りたところで中止、往復38時間で最初の挑戦を終えた。27日に再びABCから17時間で頂上に立ち、11時間半で帰った。ABCから頂上は、96年のハンス・カマーランダーが16時間45分で踏破しているから、単純に新記録とは言い切れないところだ。

チベット側からは越境登山もあった。ポーランドのヤヌシュ・アダムスキが５月21日に登頂し、そのままサウス・コルへと下った。過去の越境は３件あるが、公式に認められたものか、緊急避難として追認されたものに限られていた。アダムスキは国境侵犯の確信犯だけに、ネ政府は向こう10年間の入国禁止。中国当局は、同様の事件が再発しないよう態勢

をととのえるためとして、秋のチベット登山を禁止した。今季達成された個人記録には以下のようなものがある。カミ・リタ（46）は自身21回目の登頂を果たし、アパとプルバ・タシが保持していた最多回数記録に肩を並べた。また、アメリカ在住の女性シェルパ、ラクパ（43）は８回目の頂上に立ち、女性の最多回数記録を更新した。

ヌプツェ北西峰（ヌプツェ・ヌプⅡ、7,742m）

ヌプツェ南壁は、東西約５kmの幅で広がっている。1961年の英国隊が主峰へのルートを拓いて以降、ローツェ寄りの東峰（7,804m）南東バットレスが2003年にロシアのワレリー・ババノフとユーリ・コシェレンコによって登られ、08年にはフランスのパトリック・グレロン＝ラパほかが左寄りの新ルートから英国ルートに合流した。10月中旬、フランスのエリアス・ミレルー、フレデリック・ドグレ、ニソワ・バンジャマン・ギゴネが北西峰南壁にア新ルートを拓いた。10月13日に攻撃を始め5,950m、6,581m、6,800m、7,013mとビバークして頂稜に抜け7,443mでビバークした翌日頂上に立った。ミレルーはこれが３度目の挑戦で、第４ビバークから先が残されていた部分だった。

バーク・カン（6,942m）

ギャチュン・カンの南にあり、2014年に解禁された104座のひとつ。ヒラリー、テンジン、エルゾーグらネパール登山の発展に貢献した先人の名を冠したピークが生まれたなか、一米国人登山家ビル・バークの名が与えられた。バークは高齢になってヒマラヤ登山を始め、エヴェレストに南北両面から登頂。アジア人以外の最高齢登頂記録保持者。名誉に感激したバークは自ら隊を編成して2015年から３回続けて初登頂を目指したが、成らなかった。今季はアジアン・トレッキングに編成をまかせて自身も参加したが、本人はC1まで。頂上に立ったのは10月５日、北アイルランドのガイド、ノエル・ハナ（50）以下サーダーのペンバ・ドルジとペンバ・ツェリン、サムデン・ボーテの４人だった。

ナンパイ・ゴスムⅡ峰（7,296m）

チョー・オユーのすぐ南、チベット国境上に連なるピークのひとつ。Ⅰ峰（7,351m）はチベット名チョー・アウイ、ネパール名ではパサン・ラム・チュリ名が与えられている。

Ⅱ峰はその東にあり、2006年の労山＝ネパール合同隊が南稜から南峰まで達したほか、南壁に挑んだフランス隊が２回にわたって失敗していた。ドイツのヨースト・コブッシュ（25）は10月３日に単独で初登頂に成功した。カメラマンとコック、キッチンボーイを伴った彼は、最初フランス・ルートを試みたが、6,300m付近の氷壁でスクリューが抜けて転落。次の攻撃では南稜寄りにルートを変え、ABC（5,600m）を出発、6,400m、6,840mでビバークした後、３日午前中に最高点を踏んだ。

パンブク北峰（6,589m）

フランスのマックス・ボニオとピエール・サンシエが北壁の新ルートを登った。当初は山群の未踏峰、ルーナク・リ（6,907m）を狙ったが、2015年にダーフィット・ラマ（オーストリア）とコンラッド・アンカー（米）が試みたこのピークは、あいにくコンディションがよくなかった。パンブク北峰に目を向けた二人は、10月18日午前５時にベルクシュルントを越え、ED、WI5、80度の壁を登った。暗くなる前に１ピッチをフィックスして吹き曝しのコル（6,150m）に下り、そこでビバーク。翌朝、登り返して登攀を再開し、美しい雪稜をたどって午前９時、頂上に立った。

ラジョ・ダダ（6,426m）

チャマール（スリンギ・ヒマール主峰）の東にある未踏峰。早稲田大学山岳部の萩原鼓十郎（24）、鈴木雄大（23）、福田倫史（21）が10月17日に初登頂した。９日間のアプローチでBC（4,600m）を設け、二つの前進キャンプを建設。5,760mの最終キャンプを出発したのは17日午前３時20分だった。天候に恵まれたが深い雪のため時間を食われ、頂上に着いたのは午後５時半になった。下山は当然夜になり、最終キャンプに帰り着いたのは出発から26時間後、日付が変わってからだった。

ラルキャ・ピーク（6,425m）

マナスル北峰とラルキャ・ラの間にあり、チベット国境のラルキャ・ヒマールとは別物。ジョージア（グルジア）のゲオルギー・テプナゼ（28）とバカル・ゲラシュヴィリ（31）、アルチル・バドリアシュヴィリ（27）は秋に、旧ソ連時代を除けばジョージア人初となるルートを拓こうと南東壁を選んだ。ドゥード・コーラからラルキャ・ラを越える５日間のアプローチで4,550mにBC。さらにABCを出して5,200mまで往復した。翌日ABCまで荷揚げし、プラトーの5,600m地点にC2を作った。定めたルートは南東壁の中央部。６日間を要して９月27日に登頂した。

プンギ（6,538m）

マナスルから西に派生する支稜上にあり、ドゥード・コーラから仰いで「三本槍」と呼ばれていた。ロシアのユーリ・コシェレンコ（54）とアレクセイ・ロンチンスキー（35）が10月28日、初登頂した。26日南東壁に取付き３日間で登頂、反対側の尾根を２日間で下降した。頂稜まで５ピッチの地点で２回目のビバークをした翌日、視界のないなか、雪庇の尾根をたどって午後４時半、頂上に立った。

アンナプルナⅠ峰（8,091m）

５月11日に６人が頂上に立った。イタリアのニヴェス・メロワ、ロマーノ・ベネト夫妻はこれで２人そろって8,000m峰14座登頂となった。夫妻は98年のナンガ・パルバット（8,126m）を皮切りに、すべて無酸素で14座を完登した。夫婦そろっての成功は、もちろん初めてのこと。

1－2　中国・四川省

ゲニ山群

ウクライナのマリナ・コプテヴァとロシアのガリナ・チビトクの女性ペアがケメロン（5,870m）に、北壁から東稜の新ルートを経て第２登した。4,850mにBCを置いた二人はビバーク７回のアルパイン・スタイルで頂上に立った。

雀兒山（チョラシャン、6,163m）

中国のゴー・ジュン、リウ・ジュンフ、ツェン・シャン・シャンドンが８月９日、東峰に初登頂した。1988年に神戸大＝中国地質大隊が北面氷河から登頂したのは西峰（6,149m）だったという。今回は反対側の南面氷河からから入り、４日間のアルパイン・スタイルで東峰に登った。ビバーク地は4,900m、5,400m、5,820mの３か所。東峰は西峰と450m離れており、難しさも勝ると報告されている。三人は西峰に登らず、肩から30m下降してコルに立ち、東峰に突き上げるリッジをたどった。

1－3　インド・ヒマラヤ

ニルカンタ（6,596m）

９月28日～10月２日、アメリカ女性シャンテル・アストーガとアン・ギルバート・チェースがジェイソン・トンプソンと南西壁を初登攀した。チェースとトンプソンは前年、キャロ・ノースと挑んだが、

悪天候に阻まれていた。今回はノースに代わってアストーガが加わり、チェースと二人でルートの大部分をリードした。

アルジュナ（6,250m）

このところキシュトワールに通い続けているマルコ・プレゼリ（スロヴェニア）の一行が６月16日～18日、キジャイ・ナラから西壁を初登攀した。ウルバン・ノヴァク、アレシュ・チェセンとの３人パーティでルート名はAll or Nothing （1,400m、ED＋M7+ WI5+ A0)。もっぱら秋に訪れていたプレゼリは、氷雪の好コンディションを期待して、春を選んだ。５月29日、4,008mにBCを置き、6,013m峰に登って順応がてらルートを観察。６月10日、西壁基部にABCを置いた。16日、午前２時出発の予定は、強風が落ち着くまで３時間待機を余儀なくされた。西壁はミックス壁と傾斜の強い氷壁で、下部はロープを結ぶことなく登ったが、そこから先はミックス部を６ピッチ。核心の手前でビバークした。翌日はミックスの３ピッチに８時間もかかった。さらに、傾斜のきつい氷壁１ピッチの後、７ピッチにわたる雪壁。頂上まで３ピッチを残してビバークし、３日目の昼ごろ頂上に着いた。

英国のウィスディーン・ホーソン、ベン・シルヴェスター、ピート・グレアムは秋に南西ピラーを初登攀、Gandiva（1,400m、E3/5.11、M5）と名付けた。９月中旬BCに入り、谷の上流4,400mに装備をデポ。ピラーを仔細に見ると、最上部はかなり難しそうだった。数日の嵐が去ってから、４日分の食料を携えて出発。5,300mでビバークした翌日、ピラーの上部5,800mでビバーク。翌日6,000m台に達し、雪が出てきたところで登山靴に履き替えた。１泊後、ヘッドウォールに食い込むガリーを抜けると頂稜。さらに３ピッチで頂上だった。およそ12回の懸垂下降を繰り返すと垂氷河に出た。下るにつれて傾斜が増し、さらに５回の懸垂下降。途中のノッチで短いビバーク、明るくなるのを待って取付きに戻った。ガンディヴァとは、創造主ブラマーが勇者アルジュナに与えた弓のことである。

無名峰（6,000m）

山野井泰史と古畑隆明が８月１日、ザンスカールの未踏の6,000m峰に初登頂した。７月23日にアクショー氷河の4,150m地点にBCを置き、高所順応と下降路の偵察を行った。７月31日、東壁取付き近くの5,000mまで上がり、翌日深夜１時30分、小型テントなどビバーク装備を携えて出発した。標高差1,000mの東壁は氷雪（TD）で構成され、ロープは使わずに登り、４時間後稜線に抜けた。頂上直下250mには難しいミックス部があり、落石に脅かされたが、９時11分頂上に立った。帰りは傾斜の緩い南稜から東面を下降。往復15時間を要した。下山後、BCマネージャーのドルジ・アンチュクと相談し、「角」のような山容からルーチョ（Rucho）と命名した。

セロ・キシュトワール（6,173m）

10月14日、ドイツのトーマス・フーバー（50）とスイスのシュテファン・ジークリスト（44)、ユリアン・ツァンカー（27）が北西壁に新ルートHar Har Mahadev（Ⅶ、A3+、6b M6）を拓いた。９月13日BCに入った一行は、５日後5,050mにABCを置いて未踏の中央バットレスに取付いたが、３分の１ほど登ったところでBCまで下り、作戦を練りなおした。新たな攻撃は10月８日から開始し、１週間かけて頂上に抜けた。ルートは400mのミックス壁に始まり、岩壁部24ピッチ600mで終了する。ポータレッジを用いて４か所にキャンプを設け、頂上に立ったのは14日のことだった。

グプタ（6,904m）

キシュトワールのダルラン・ナラ左岸にある。ジム・ロウザー（英）、マーク・リチー、マーク・ウィルフォード（米）が秋に初登頂した。９月12日からキャラバン。14日にBC適地が見つかったが、あいにく右岸にあってグプタへ行くには川を渡らなければならず、チロリアン・ブリッジを張ってアプローチを確保した。対岸にABCを置いて物資を集積すると18日、4,600mにハイキャンプを建てた。リチーとウィルフォードは北東壁から東稜に出られそうなラインを発見、出だしにロープを固定した。26日、4,800mのC1からロープの末端まで登り、北東壁の中ほどにC2。翌日東稜に出た。そこから、数ピッチで頂上が手招きしているような場所に広いテラスを見つけ、最後のビバークとした。28日は岩が暖まってから出ることにして、９時まで待機。最後は垂直の北壁からハングした雪庇を避け、稜線の雪をかき分けると頂上だった。下降は北東壁をダイレクトに下り、雪のガリーを10ピッチでC1に到着。夕方６時にはチロリアン・ブリッジに着き、BCへと凱旋した。

1－4　パキスタン

K2（8,611m）、ブロード・ピーク（8,051m）

K2は、初登頂60周年の2014年に30名を超える登頂者を記録して以来２年間成功を見なかったが、ミンマ・ギャルジェ（41）のドリーマーズ・デスティネーション公募隊が７月28日に12人を頂上に送った。他の隊が、頂上ピラミッドの雪崩を恐れて早々と断念する一方、C2とC3で待機中に吹き募った強風で上部の新雪が吹き払われたと判断して攻撃を続行、成功に結び付けた。

K2の成功から１週間後、一行はブロード・ピークにも９名を登頂させた。このほかオーストリアのフルテンバッハ・アドベンチャー隊から６名、スイスのコプラー＆パートナー公募隊から４名、サミット・クライム公募隊（米）からオスカル・カディアチ（スペイン、64）ら４名も頂上に立った。カディアチは前年8,000m峰×14座に王手をかけて挑んだが失敗、１年後に夢を叶えた。

ガッシャブルムⅠ峰（8,080m）

チェコのマレク・ホレチェク（43）が７月30日、これまでに４回試みて果たさなかった南西壁の直登ルートに成功した。ズデニェク・ハーク（37）をパートナーとして７月25日に取付き、５回のビバークを繰り返して登頂、２日間で下降した。

南西壁は、1983年にポーランドのヴォイチェフ・クルティカとイェジ・ククチカが登ったが、ヘッドウォールで行き詰まり、南東稜へトラバース。ロシアのワレリー・ババノフとヴィクトル・アファナシエフは2008年、西稜へ抜けて登頂していた。ホレチェクは、上記２ルートがいずれも直接頂上に続いていないことから直登をもくろみ、2009年にズデニェク・フルビー（チェコ）と初めて挑戦、7,600mに達した。しかし、４年後には、6,800mから引き返す途中にフルビーが転落死してしまった。その後も15年にトマシュ・ペトレチェク、16年にオンドレイ・マンドゥラ（いずれもチェコ）と組んで挑んだが、16年の7,700mを最高到達点として敗退に終わっていた。今回は、そこから先のミックス壁をビバーク３回で登りきり、待望の頂上に立つことができた。取付いてから８日目のことだった。下降路は北面に採り、２日間で氷河に降り立った。ルート名はSatisfaction（3,000m、ED＋、M7 WI5+）。

ベアトリス（5,800m）

チャラクサ氷河に入って4,200mにBCを置いた佐藤裕介と増本亮が８月１日～９日、東壁をオールフ

リーで登った（600m、5.13a）。17ピッチで壁を抜け出し、さらに２ピッチはミックスの稜線、最後は雪稜70mで頂上に立った。東壁には３本のルートがあるが、今回選んだのは1977年に英国隊が登ったExcellent Adventure（750m、ED+ A3）。壁の中央を600m以上にわたって続くクラックをたどるラインで、ルート上に残置されたボルトは終了点のアンカーだけだった。下部120mは逆層のハングから雪田へ。５ピッチ目から11ピッチ目はフリー化の核心部となり、5.12台５ピッチと核心（10ピッチ目）は5.13a。オンサイトできなかったピッチは、エイドで登攀後にフリー化した。

K７西峰（6,615m）

横山勝丘と長門敬明は８月５日～10日、標高差2,300mを超える長大な南西稜から頂上を陥れた。2014年に横山が、増本亮、佐藤裕介の３人で挑んだときは、悪天候と複雑なリッジに手を焼いて途中で敗退していた。８月２日、下部岩壁を９ピッチ（最高5.11c）登ってフィックス。５日に攻撃を開始し、バダル・ピークまでの複雑な岩稜を３日間かけて登った（35ピッチ、5.11c R A2）。その先は雪と氷の稜線となり、技術的には難しくないものの、的確な判断で素早く行動することが求められた。取付きから５日目の９日午前中頂上に達し、その日のうちに北西壁を下降。氷河に下りてビバークした翌日、対岸の尾根を乗り越えてBCに帰った。ルート名はSun Patch Spur（Ⅵ、2,300m＋）。

シスパーレ（7,611m）

1974年に西ドイツ＝ポーランド隊が東稜から初登頂し、20年後に菰野山岳会隊が第２登した山だが、それ以外に登られたことがない。2007年に北東壁、12年と13年に南西壁をそれぞれ異なったパートナーと試みた平出和也が８月18日～24日、中島健郎と組んで北東壁を初登攀、通算第３登を記録した。ルートは2,700m（WI5 M6）。この登攀には、2018年度のピオレドール賞が与えられ、平出にとっては2008年に故・谷口けいと登ったカメット南東壁で受賞して以来２回目となった。

1－5　アルプス

マッターホルン（4,478m）

３月15日～16日、アレクサンダー・フーバー（独）が、スイスのトーマス・ゼンフ、ダニ・アーノルトと北壁右寄りの「ツムットの鼻」にSchweizernase（スイス人の鼻、Ⅶ+、A4）と名付けた新ルートを拓いた。1969年にアレッサンドロ・ゴニャとレオ・チェルッティが登ったのとほぼ同じところから取付き、上部のオーバーハングをまっすぐに抜けた。３月15日、ヘルンリ小屋を出た三人は、ゴニャ＝チェルッティ・ルートに入った。12ピッチで右へ行くところから直上し、ハングの下でビバーク。翌日は未知の部分にかかり、フーバー曰く「チマ・オヴェストのルーフみたいなハング」をエイドで攻めた。出だしに２本、途中のビレイ２か所に１本ずつボルトを打ち、２時間で突破。３人は突然壮大な鼻の上に立っていた。そこから先を４時間行くと傾斜も緩み、さらに１時間で頂上に立った。

ドロミテ

３月17日、スイスのジーモン・ギートルとミッヒ・ヴォールレーベンが、チマ・オヴェストからグランデ、ピッコラ、プンタ・ディ・フリーダ、ピッコリシマを９時間15分で継続した。トレ・チメ・ディ・ラヴァレドの全山が冬季に継続されたのはこれが初めてのことと思われる。

1−6 ノルウェー/グリーンランド/カナダ北極圏

トロール・ウォール

ポーランドのマレク・ラガノヴィッチが１月11日、Suser gjennom Harryland（650m、5.10b A3）を16日間で単独登攀した。この壁の中でも難しいほうに属するルートだが、惜しいことに、頂上まで抜けずに壁の途中に終了点がある。上部がスラブ状になるためのようだ。ラガノヴィッチは、トロールの冬季ソロをやるときに３つのルールを定めている。①ロープをフィックスしない、②カプセル・スタイルはやらない、そして③必ずトロールヴェッゲンの頂上まで行くというものだ。今回の登攀でもそれを守り、他のいずれかのルート上部をたどって頂上に立ち、冬季単独初登攀を達成した。

アポッスル・トンメルフィンゲル（2,315m）

スイスのシルヴァン・シュープバッハ、クリスチャン・ルデルジェルベ、ファビオ・ルポ、フランスのジェローム・サリヴァン、アントワーヌ・モワヌヴィルから成る国際チームが７月、西壁にビッグウォール・ルートMetrophobia（1,700m、120°の氷とA2+ 7a）を拓いた。山名はアポッスルの親指を意味し、1975年にモーリス・バラールらのフランス隊によって南ピラーが登られたが、西壁は今回が初登攀となる。

バフィン島

マレク・ラガノヴィッチが３月～５月の７週間入山、シップス・プラウに２本の新ルートを拓いた。３月３日にマルチン・トマシェフスキとサムフォード・フィヨルドに入山したが、寒気と強風でトマシェフスキが凍傷を負って帰国。独りになったラガノヴィッチは北方のスコット・アイランドに向かい、シップス・プラウ北壁の基部にBCを置いた。目標は北壁だったが、この時期の寒さでは論外。観察した結果、東壁なら２、３時間だけ陽光が差すことが分かり、まずこちらを狙った。東壁の登攀には17日間を要し、Mantra Mandala（Ⅵ、A3＋）を完成。１週間休養後北壁に向かい、出だしにフィックスした。風が強まり状況は悪化したが13日間で完登、Secret of Science（Ⅵ、A4）と名付けた。最終日は新雪が降り積もり、重いホールバッグを担いでの下降はきわめて危険なものとなった。ボルトやリベットを打ち込むのを嫌うラガノヴィッチはMantra……で６回バットフックを使ったが、ボルトは全く打たなかった。

1−7 アラスカ

ベアーズ・トゥース（3,070m）

グレッグ・ボズウェル（26）とウィル・シム（27、共に英）が４月、バックスキン氷河で２本のアルパインルートを初登攀した。最初に登ったのは、ベアーズ・トゥース南東壁のBeastiality（1,400m、30ピッチ）で、明らかにワールドクラスだとコメントしている。次のルートは、氷河をはさんで対岸のピークに拓いたShark Fishing。ベアーズ……を登っていたときに認めたラインで、幾分短く、稜線に抜ける手前に２ピッチのミックス部が出てくる。

ハンティントン（3,731m）

クリント・ヘランダーとジェス・ロスケリーが、４月18日から25日の１週間で全長2,600mに迫る南稜を初登攀した。４月18日、トコシトナ氷河の2,500m地点に降り立ち、５日分の食料・装備を持って午後４時45分に出発した。クレバス帯で一泊した翌日、第１峰（9,460ft）南壁の2,740mでビバーク。翌20日、第２峰（9,800ft）の南壁にいいレッジを見つけた。そこには日本隊の遺棄した装備（縄バシゴ、スノーバー、約30本のピトンなど）が放置されていた

が、ピトンの一部は２日後に第３峰（10,100ft）の下りでアンカーを作る足しになった。イディオット・ピークの登りではテントが張れず、ロープで体を縛り付けて寝た。翌23日、頂上を越えてハンティントンとのコルに立つと南方から雲が湧き出し、登頂したときにはもう視界を奪われていた。頂稜の下りでテントを張って一泊。なんとか西壁クーロワールの入り口を見つけて下降に移ったのは25日になってからだった。

ハンター（4,442m）

コリン・ヘイリーが５月に北バットレスをソロ、BCから17時間13分で頂上を往復した。彼は５年前に一度試みたが、疲労のため頂上まで100m足らずで敗退していた。前年、アレックス・オノルドとパタゴニアでトーレ・トラバースを１日で達成して以来、ハンター往復は心に引っかかっており、５年の経験を積み重ねた今ならできると確信があった。５月12日に入山し、４日後北バットレスに取付く。ルートは、５年前に採ったのと同様抵抗の少ないラインを選択し、一部バリエーションをまじえながら登った。12年のときに比べればスピードは格段に上がり、ベルクシュルントから雪庇ビバークまで５時間18分、シュルントからの頂上往復を15時間22分で終えることができた。

1－8　アメリカ

ヨセミテ渓谷

６月３日、アレックス・オノルドがエル・キャピタンのフリーライダーを３時間56分でフリーソロした。5.13台のピッチが連続するサラテのヘッドウォールを左から迂回する派生ラインで、エル・キャピタンのフリールートとして最も多く再登されている。そうは言っても、中間に位置する最大の核心であるテフロン・コーナーは滑りやすいシビアなステミングを要求される5.12dで、ここをフリーソロするのは非現実的と考えられてきた。

同時期、サーシャ・ディジュリアンとジョン・コールドウェルがヨセミテ・フォールの右に位置するMisty Wall （5.13、15ピッチ）のフリー化に成功した。1963年にロイヤル・ロビンズとディック・マクラッケンがエイドで初登（5.9 A3）し、90年代にはウォルト・シプリーらによってフリー化が試みられたが、数ポイントのエイドが残されていた（5.11 d A0）。ディジュリアンとコールドウェルは、約14時間を費やして、5.13のルーフを含む各ピッチをそれぞれオールフリーで登った。

1－9　南アメリカ

ペルー・アンデス

ブランカ山群のチャクララフ東峰（6,001m）東壁がカナダ・ペアによって初めて直登された。アリック・バーグ（29）とクエンティン・ロバーツ（25）が７月中旬、東壁中央をオールフリーの２日間で完登、The Devil’s Reach Around（M6 5.10）とした。南壁がアイスフルートを刻んだ、白く優雅な姿を見せるのと対照的に、東壁は、中間部のロックバンドとヘッドウォールに雪も付けずに黒々としている。1999年のスロヴェニア隊が初登攀したが（The Shriek of Black Stone、5.10 A2）、上部はリッジに逃げているので、ヘッドウォールを最後まで直登したのは今回が初めて。バーグとロバーツは、昼間の高温で悪化した氷雪の状態が落ち着くまで途中で待機した時間も含め夜間行動を交えた２日間で頂上に立ち、頂上直下でビバークした。今季のペルー・アンデスは氷雪のコンディションがよかったが、前年続いた好天で不安定だった雪がすべて落ちてしまったからだろうという。

1−10 パタゴニア

トーレ・セントラル・デル・パイネ（パイネ中央岩塔）

ベルギーのニコラ・ファブレス、セアン・ヴィラヌーヴァ・オドリスコル、ジーベ・ヴァンヘーが、東壁のEl Regalo de Mwonoをフリー化して8a+とした。1992年にポール・プリチャード（英）ら４人が初登した1,200m（ABO、5.10　A4）の壮大なルートである。今季パタゴニア本来の悪天候が舞い戻ってクライマーを悩ませ、このルートの左手を走るRiders on the Stormのフリー化を狙ったメイヤン・スミス＝ゴバトとブレット・ハリントンは大雪で涙を呑んだ。ファブレスらはそんな悪条件の下でポータレッジ・キャンプを設営し、辛抱強くフリー化を進め、19日間を要して完登した。予定は15日間だったが、最後の35mをフリー化するのに、さらに４日間を要した。

セロ・ムラジョン（2,831m）

イタリアのダヴィド・バッチ、マッテオ・ベルナスコーネ、マッテオ・デッラ・ボルデッラが２月３日～５日に東壁を初登攀した。1984年にカジミーロ・フェラーリのイタリア隊が北東稜から初登頂したこの山には、その後、北壁にシュテファン・グロヴァッツが２本のルートを拓き、南東ピラーも登られたが、東壁は未踏だった。三人は嵐の直後で全面氷におおわれた東壁に取付き、前年偵察したときのラインに挑んだ。出だしは90度に達する氷のガリー、中間部はM5からM6のミックス壁となっていた。ヘッドウォールの300mを前にビバークした翌日、最後の30mで最も厳しい登攀強いられた末、頂上に立った。

アグハ・ギヨーメ（2,579m）

９月８日、オーストリアのマルクス・プッヒャーが冬季単独初登頂に成功した。当初はフィッツロイを狙ったが、強風に追い返されたため、こちらに変更したもの。プッヒャーは1968年フランス・ルート（ベルナール・アミとピエール・ヴィダイエ）から頂上に立ち、同じ年のジョエル・コクニオとフランソワ・ギヨーのルートを下降した。

セロ・ポローネ（2,600m）

イタリアのマッテオ・デッラ・ボルデッラとルカ・スキエーラが１月25日、北西壁に新ルートを拓いた。Maracaiboと命名されたルートは稜線まで300m（7a　C1）。好天が訪れるまで長い間待たされた二人は、２日間の機会をとらえて成功した。25日未明に出発、午前７時ごろ取付きに着き、気温が低いので２時間待ってから登りはじめた。壁の雪はほとんど落ちていた。稜線直下で脆い岩に出合い、右へトラバースすると、再び硬い岩となった。尾根に出たとたん天候が悪化。稜線の反対側へ下降したため長い帰路となり、エル・チャルテンに戻ったのは、出発後24時間経っていた。

1−11 南極大陸とその周辺

クインモード・ランド

コンラッド・アンカー以下、アレックス・オノルド、シダー・ライト、ジミー・チン、サヴァナ・カミンズ、アナ・プファッフとカメラマンのパブロ・デュラナから成るアメリカ・チームが、12月にフェンリスシェフェーテン（狼の顎）を訪れた。ウルヴェタナやホルタナ、ホルスティンドなど、氷床から突き出した岩峰が立ち並ぶ山群である。一行はここでいくつもの新ルートを登った。

まずBCを取り囲む岩峰を物色し、未踏の岩峰を見つけてオノルドとライトが初登頂、ザ・ペンギンと名付けた。この二人にカミンズ、プファッフを加えてホルタナ（2,650m）に向かい、2009年にドイツの

フーバー兄弟がシュテファン・ジークリストらと登ったSkywalkを再登。アンカーとチンはウルヴェタナ北西壁を初登攀。オノルドとライトはマウント・フェンリスの新ルート（400m）を含む３本の初登攀に成功した。一行は合計13のルートを登ったが、そのうち７本が新ルートだった。

イギリスのレオ・ホールディングとジーン・バーガン、ニュージーランドのマーク・セドンも同じころクインモード・ランドを訪れ、ゴシック山群のオーガン・パイプスにあるスペクターに向かった。基部を一周して南壁に新ルートを拓こうとしたが、結局、マッグスとエドマンドのスタンプ兄弟（アメリカ）が1980年に登った北壁に落ち着いた。12月７日午前10時に登りはじめ、ところどころでバリエーションを拓きながら、真夜中近くに登頂。BCに帰ったのは出発してから20時間後だった

第２部　2018年度のおもな記録

2－1　ネパール/チベット

エヴェレスト（8,848m）

これまでだれも成し遂げていない無酸素での冬季登頂に、アレハンドロ・チコン（36、スペイン）とムハンマド・アリ・サドパラ（パキスタン）が挑んだ。二人は2016年にシモーネ・モーロとナンガ・パルバットに冬季初登頂していた。チコンは、前年も挑んでサウス・コルで敗退していた。今回は４日間で6,050mにC1、6,400mにC2を建設。１月26日にはプモ・リに登頂した。頂上に立ったのは二人のほかヌリとテンバ・ボーテ。その後２月下旬まで機会は訪れず、第４週に予想を上回る強風と寒気に遭遇。サウス・コルに達することも叶わず、7,850mで断念した。

2018年春の登頂者は南北合わせて807名、延べ9,112名に達した。５月中旬から10日間好天に恵まれこと、一昨年の大地震で崩壊したヒラリー・ステップの通過が容易になったことなどが原因だが、無視できないのは、シェルパが牽引するネパール公募隊の台頭だろう。料金の安さを武器にクライアントを集め、欧米の有力公募隊に代わって、8,000m峰でも登頂シーンを席巻するまでになってきた。

個人の登頂回数の点ではアパ（58）、プルバ・タシ（47）、カミ・リタ（48）がいずれも21回で肩を並べてきたが、５月16日にチベット側から頂上に立ったカミ・リタが頭ひとつ抜け出した。女性では米国在住のアン・ラクパ（44）が９回目の登頂を果たした。彼女は2000年に登頂し、エヴェレストに登って生還した最初のネパール女性となった。93年にネパール女性初登頂で華々しく顕彰されたパサン・ラムはサウス・コルまでたどり着けず、南峰でビバーク中に亡くなっていた。

ローツェ（8,516m）

ローツェ西壁といえば、サウス・コルへのルートとして多くの登山者が下部斜面を往復しているが、上部には岩壁帯を貫いて一条のクーロワールが食い込んでいる。1956年のスイス隊が初登頂に利用したもので、スキー滑降の対象として注目され、これまで何回か挑戦されたが、氷雪が途切れていたり、8500mという高度に負けて登頂できなかったり、いずれも失敗に終わっていた。

女流スキーヤー、ヒラリー・ネルソンとパートナーのジム・モリソン（米）は初滑降を目座して９月初めBC に入った。この秋はエヴェレストに向かう隊がなく、誰もいないウェスタンクウムに進出、6,400mにC2を設けた。頂上へ向かったのは９月30日。イラ・ヌル、フー・タシ両シェルパのサポートを受けて、ビデオカメラマンのダッチ・シンプソン、ニック・カリシュと共に午後１時27分頂上に立つと、標

高差760mのクーロワールへとドロップイン。狭いクーロワールを抜け出して下部斜面を滑り、C2で一泊。翌日C1まで約2,130mの滑降に成功した。

プモ・リ（7,161m）

ルーマニアのゾルト・トロック、ロメオ・ポパ、テオフィル・ヴラドが10月中旬に南壁の左寄りをたどる新ルートに成功した。トロックが前年春にヴラド・カプサンと雪崩に追い返されたラインで、今回はポパ、ヴラドとの３人で挑んだもの。春に比べれば積雪が多く、核心で露出した岩壁に出合った以外はずっとアイスクライミングが続いた。三人はABC以降アルパイン・スタイルで攻撃し、完登まで４回のビバークを要した。初めの２回では狭いレッジ、次の２回ではテントを張ることができた。稜線に出たのは４日目だったが、疲労が激しく、１日休養しなければならなかった。頂上稜線は強風が吹き荒れ、這うようにして登頂、翌日西壁を下降路に採り、途中もう一泊して氷河に降り立った。

キャジョ・リ（6,186m）

マレク・ホレチェクとズデニェク・ハーク（チェコ）が５月25日から28日、西壁から東壁へと回る新ルートに成功した。ホレチェクが2017年にヤン・スモレニと挑んで敗退していたもので、パートナーを替えて再挑戦。基部でビバークし、翌早朝に出発。ルートは前回に比べドライなコンディションで、稜線に抜け出すまでの700mは脆い岩場と闘わなければならなかった。稜線に出た直後にハークが落石に打たれが、ヘルメットのおかげで負傷は免れた。この日は「鷲の巣」と呼んだプラットホームでビバークした。翌日も不安定な岩に苦労したが、３回目のビバークを覚悟したとき雲の切れ目に頂上が見えたので続行、暗くなってから頂上に着いた。この日は300mほど下ったところでビバーク、翌日谷間へと下った。新ルートは1,600m　ED+、M6　WI4+、Lapse of Reasonと命名された。

ルーナク・リ（6,907m）

ロルワーリン・ヒマールの一角、チベットとの国境を成す一連のピークの最高峰。オーストリアのダーフィット・ラマ（28）は2015年と16年に挑んだが、わずかのところで頂上を逸した。15年にコンラッド・アンカー（米）と組んで西稜を試みたが、300mを残して敗退した。２人は翌年も挑んだが、54歳になっていたアンカーが5,800m地点で心臓に異状を覚えて引き返し、緊急搬出された。ラマはその後ルートを変えてソロに切り替え、前回より50m高くまで達したものの、そこが限界だった。

今回、アンカーは加わらず、ラマが単独で攻撃した。10月23日深夜にBCをでたラマは、夜間登攀で6,400mに達してビバーク。昼間は休養して翌朝４時に出るつもりだったが、強風が治まるまで２時間待機。陽光で暖められたなか6,800mで2回目のビバーク、翌日午前中に頂上を踏んだ。

ランドゥン（リピムツェ、6,357m）

2014年に解禁された104座のひとつで、Langdungという山名が与えられたが、じつは1955年に英国のアルフレッド・グレゴリー隊がロルワーリン・ヒマールで19座の6,000m峰に登り、周辺の詳しい地図を作ったおりにリピムツェと呼んだピークである。

2017年12月20日、ニマ・テンジ（37）以下４人のロルワーリン・シェルパが初登頂した。メンバーはダワ・ヤンズム（27、女性）とその兄にあたるダワ・ギャルジェ（38）、パサン・キダール（35）。12月12日から登りはじめ、５日間でハイキャンプを建設。20日に側壁から南東稜に抜けて、16時間で頂上を往

復した。ルートは650m、PD。Namasteと命名した。下降路は南壁に採ったが、積雪が少なく、落石に悩まされたり、アンカーを取るのに苦労したりしたという。なお、２人のメンバーが西峰（6,351m）と中央峰（6,350m）にも立った。10月下旬にはスペインのパブロ・ルイヒ、ヘスス・イバルス、エドゥ・レシオが500mの花崗岩壁から1,000mのリッジをたどる新ルートで第2登した。入山３日目にABCを発して４日目にはリッジの始まりに到達。長く脆い（Ⅳ～Ⅴ）のリッジを縦走して10月28日に登頂した。ルート名はBihana（Amaneccer、1,500m、ED＋6c＋）。下降路は西壁に採った。

ヒムジュン（7,092m）

オーストリアのフィートゥス・アウアー、ゼバスチャン・フックス、シュテファン・ラルヒャーが11月に灘西壁を３日間で登った。4,800mにBCを置いて２回の順応登山をこなし、南東稜の6,150mまで登って予定した新ルートの状況を確かめた。好天の予報を受けて予定を早めて南西壁に取り付いたトリオは10月31日の朝7時にBCを出発。午後５時6,180mのC1に着き、夜11時に出て夜通し登り続け、翌日午前９時に登頂した。

グルジャ・ヒマール（7,193m）

1969年の解禁時に富山隊が西稜から初登頂、72年ピエール・ビュタン隊長のフランス隊が北稜から第２登した。96年までに30回の登頂を数えるが、以後の記録はない。キム・チャンホ隊長（49）の韓国隊が新ルートを狙って南面の3,500mにBCを置いたが、10月12日に大嵐に襲われてキャンプが壊滅、隊長以下５隊員とネパール人ガイド４人が亡くなった。当初、雪崩説も流れたが、捜索に派遣されたヘリからの映像では、遺体（の入った寝袋）は、積雪のない草地やボルダーの斜面に散らばっていたという。犠牲になったのは、韓国側がキム隊長とユ・ヤンジク、イ・ジェフン、ジョン・ジュンモ、リム・イルジン（撮影担当）の５人。ネパール側がツェリン・ボーテ、ラクパ・サンブ・ボーテ、ネトラ・バハドゥル・チャンテル、プルブ・ボーテの４人だった。

シシャパンマ（8,027m）

ブルガリアのボーヤン・ペトロフ（45）が４月29日に単独で頂上に向かったまま行方不明になった。これまでに10座の8,000m峰に登ってきたペトロフは今年３座の登頂を狙い、春にシシャパンマとエヴェレスト、秋にチョー・オユー（8,188m）を目指していた。彼は、別の隊に属するダビッド・クライン（ブルガリア）と途中まで一緒に登り、その後単独で出発した。エヴェレストを後に控えていたため頂上攻撃を急いだのであろうか。５月３日には7,300mのC3付近を登る姿がBCから遠望されている。５日には高所キャンプに達した別の隊がペトロフのテントを発見した。

2－2　インド・ヒマラヤ

ジャヌコット（6,805m）

ガンゴトリ氷河最奥部、チャウカンバとサトパントの間にある未踏峰。マルカム・バス、ポール・フィッグ、ガイ・バッキンガム（英）が６月初めに初登頂した。1980年代にインド隊が手を付けたこの山は2000年代を迎えて相次いで挑戦されたが、未踏で残されていた。今回の三人は５月に入山し、BCから18km遡ってABCを設けた。６月３日午前０時に出発して南西バットレスに取付き、600mを稼いで5,900mでビバーク。翌日は狭いレッジでもう一夜を過ごした。バットレスから南稜に抜けると、雷を伴った嵐が近づいてきたため、300mの岩稜で逃げ場を捜し

た。さいわい、彼方に見えた岩峰の下30mに大きな雪の凹地が見つかり、そこにテントを張ってビバークすることができた。翌日は雨交じりの湿雪が降るなか、400mにわたるナイフエッジと雪庇の稜線をたどって頂上に立つことができた。

セロ・キシュトワール（6,173m）

佐藤裕介、鳴海玄稀、山本大貴が９月20日～23日、北東壁を初登攀した。往復５日間の予定でABCを出発したが、天候悪化の兆候が見えたのでスピードアップ。一気に1,000m登って最初のビバークをした翌日に、テントや寝袋を残して一気に頂上を狙った。トリッキーなミックス壁から薄く氷をまとった上部壁へ。暗くなっても登り続け、夜11時頂上に立った。下降は２時間の休息をはさんだだけで、およそ10回の懸垂下降で翌日昼ごろビバーク地Cに帰った。このときすでに降雪が始まり、雪崩に追われるように20回の懸垂下降の末、真夜中ごろようやく落ち着ける場所を見つけた。４日目も雪は降り続け、ABC に戻ってみるとテントは雪に押しつぶされていた。なんとか再建したもののここも安全ではなく、闇をついて下降を継続。200m下るのに４時間もかかる始末だったが、なんとか安全な岩の下に逃げ込み、翌日１日積雪が落ち着くのを待ってBC に帰ることができた。ルート名はAal izz Well（1,500m WI5 M6)。若い男３人の絆を描いたインド映画のタイトルである。

ルンゴファルカ（6,495m）

アメリカのティノ・ヴィヤヌエヴァとアラン・ルソーが秋に、ザンスカールのスル谷に入って初登頂した。二人は９月６日にフランスを発ってインド入り。3,900mにBCを設営し、最初の短い好天が訪れた機会に北壁をダイレクトに登るラインに挑んだ。ベルクシュルントの手前でビバークしたが、6,000mまで登ったところで疲労のため中止、BC に戻った。

４日間休んでから目標を北稜に変え、1,000m高いところにABCを設営した。翌日AI3の９ピッチを登るとコルに飛び出してビバーク。次の日は、M6の難しさが続いたためわずか９ピッチしか稼げなかったが、5,900m地点で氷のカーテンの裏側に洞穴を発見。３日目はリッジ伝いに20ピッチをこなし、夜７時ごろ6,100mに到達。ここにテントが半分乗る程度のレッジをしつらえ、交代で眠った。４日目の朝は雲も風もなく明けた。ヘッドウォールに食い込んだ氷の溝を登れば頂上だと期待したが、まだデリケートな雪庇の尾根が続いていた。頂上からの下降には西壁を選んだが、未知の場所だけに簡単にはいかなかった。この新ルートはⅥ　M6 WI4＋、標高差1,200mだった。

2－3　パキスタン

K2（8,611m)、ナンガ・パルバット（8,126m）

冬季未踏の8,000m峰として残るK２にポーランドが本腰を入れて取り組んだ。クシストフ・ヴィエリツキ隊長のナショナルチーム13人で、隊員はアダム・ビエレツキらのほか、元カザフのデニス・ウルブコも国籍を移して参加した。ポーランドは1988年に故アンジェイ・ザヴァダ隊長の下、南東稜からK２に挑んで7,380mで敗退。2002年にはヴィエリツキが隊長となり、カザフとの合同で北稜を攻撃。そのとき7,680mの最高到達点を記録したのがウルブコだった。

一行は年明けから南南東リブにルートを採って登山を進めていたところ、１月末になって、ナンガ・パルバット（8,126m）に挑んでいたエリザベート・ルヴォル（37）とトマシュ・マツキェヴィッチ（43）が登頂後に遭難、救助要請してきた。隊長は、メンバー中最強のデニス・ウルブコ（44）とアダム・ビ

エレツキ（34）に加えて、ヤロスラフ・ボトルとピョトレク・トマラの派遣を決めた。４人はバルトロ氷河上のBCからパキスタン陸軍のヘリにピックアップされてナンガ・パルバットへ急行、１月28日に4,900m地点に降り立った。ウルブコとビエレツキは、休む間もなく夜間登攀を開始。ルヴォルらの採ったルート（北峰Ⅰ北西壁）が西壁通常ルートに合する地点に向けてキンスホーファー・ウォールを登り、動けなくなったマツキェヴィッチを7,200mに残して下りてきたルヴォルと合流。彼女はすぐイスラマバードへ運ばれ、帰国・入院した。

任務を終えたウルブコらは２月２日K2のBCに復帰した。ところが、南南東リブでは落石が頻発し、ビエレツキとラファエル・フロニアが負傷。ビエレツキは登攀に復帰できたが、フロニアは前腕骨折で下山・帰国を余儀なくされた。ヴィエリツキ隊長は南東稜へのルート変更を決めたが、ウルブコは、かねてからポーランド隊の進捗が遅いことに対する不満をインターネットで洩らしていた。ウルブコは２月第４週の末に単身攻撃を試み、南東稜肩直下の7,600mで断念した。隊長は勝手な行動を批判し、隊のインターネットを使用することを禁止。ウルブコは３月を待たずにBCを去った。３月に入ってからビエレツキとヤヌシュ・ゴワブが南東稜下部を登ってみたところ、C1への固定ロープは80cmの積雪に埋まり、C2、C3のテントにも被害が及んだと推測されたため、撤収を決めた。

７月になると21、22、23の３日間に66名が頂上に立ち、１シーズンの最高記録となった。これまでの記録は、初登頂50周年にあたる2004年の51名、60周年の2014年が48名で続いていた。

小谷部明隊長（47）ら10人の北日本隊が最初に入山したが、C2まで行なったルート工作は、６月末の降雪で水泡に帰し、７月７日にはカナダ国際隊（９人）のセルジュ・デスルオー隊長（53）がハウスのチムニー下のC2（6,700m）から下降中に転落死した。古い固定ロープの切断によるという説もある。遺体はABCに収容され、スカルドに運ばれた。この事故で同隊は登山を断念した。

７月も中旬を迎えると天候は回復し、21日には頂上までルート工作が完了。チャン・ダワ・シェルパのセブンサミット公募隊など31名が頂上に立った。なかには最初のラテン・アメリカ女性（ビリディアナ・アルバレス）や最初のモンゴル人（バダムガラフ・ガンガアルマ）も含まれていた。

翌22日にはポーランドのアンジェイ・バルギエル（30）が頂上から初めてのスキー滑降に成功した。11時30分頂上に立った彼は、ボトルネックから肩を経て南南東リブ沿いの斜面を滑り、途中から右へトラバースして、南壁下部の雪稜を下りたもの。この雪稜は、1986年にククチカとピョトロフスキが南壁を初登攀した際にアプローチに使ったもの。この日は北日本隊の東山高志（37）、遊佐正明（55）、林恭子（45）、渡辺康二郎（41）、飯澤政人（32）、田口篤志（30）が高所ポーターのファザル・アリ・シムシャール、サルバズと共に登頂。しかし帰途8300m地点から渡辺隊員が滑落死してしまった。ギャレット・マディソンの米公募隊も隊長以下11名と高所ポーター13名を頂上に送った。

さらに23日、スペイン・バルセロナの体育教師セルヒ・ミンゴテも高所ポーター１名と共に無酸素で登頂した。彼は16日にブロード・ピークに登ったその足でK2に登ったもの。この両峰を１週間以内に登頂したクライマーは９人いるが、無酸素ではミンゴテが初めてとなる。

ガッシャブルムⅣ峰（7,925m）

1958年にイタリア隊のボナッティとマウリが初登

頂してから60周年を迎えたこの山に再びイタリア隊が挑んだ。ルートは当時と同じ北東稜で、ダニエーレ・ベルナスコーニ、マウリツィオ・ジョルダーノ、マルコ・マジョーリ、マルコ・ファリーナ、ヴァレリオ・ステッラの５人で同ルートの再登を目指していた。しかし７月11日、C2から下降している途中、ジョルダーノ（32）が落ちてきた氷塊に打たれて亡くなった。

チャンギ・タワーⅡ（6,250m）

この山の主峰は2015年にスティーブ・スウェンソンのアメリカ隊によって登られた。その記録を参考にしたジェス・ロスケリーとカート・ロス（米）はベルギーのネルソン・ネイリンクと３人でナンマー谷を訪れ、二つの初登頂をものにした。好天期間が訪れた７月中旬、２日間のアプローチで4400mにBCを設けた三人は、近くにある5,800m級の岩峰で高所順応後チョタ・バイ（6,321m）に挑んだ。山名は、巨大なK6（7,282m）に対して「小さな弟」を意味している。登攀初日の８月３日、ヘッドウォールの基部まで登って午後の暑熱を避けるためにテントを張った。翌日は終日登り続け、頂上直下で気温が下がって落石がやむのを待つ。登頂したのは午後６時半。すぐさま下降し、３日間で終えた。ルート名は、Naps & Noms（AI4）とした。

タガス谷

ニコラ・ファブレス、ジャン＝ルイ・ヴェルツ（ベルギー）とマチュー・メイナディエ（仏）、カルロス・モリーナ（アルゼンチン）が二つの6,000m峰に初登頂した。キャンプの正面にある岩峰に取り付いてから６日目、ポータレッジと固定ロープから解放されて頂上を攻撃した。下降に移ると、あっという間に暗くなった。脆い岩の地帯で、どこから石が落ちてくるか判別できない暗さだった。夜10時ごろ、ポータレッジに通じる固定ロープの上端に達した。そのまま下降して翌朝、回収に来ればよかったが、成功に気分をよくし、大胆になっていたので、新しくアンカーを作ろうとした。モリーナは、登りのアンカーを打ったとき足場にしたレッジに立って作業を見守っていた。ところが、設置し終えたと同時にモリーナの足場が崩れ、闇の中から無数の岩が降ってきた。メイナディエは頭と腕に落石を受け、一瞬気を失った。ポータレッジまで70mだったのですぐさま下降、２時間ほどで彼も落ち着いた。夜明けとともに下ろすと、昼には陸軍ヘリが収容に飛来した。次の１週間は壁に残した装備の回収で過ごしたが、最終日に天候回復が見込まれたので、ファブレスとモリーナでもうひとつの目標に出発。前日降った20cmの雪にもかかわらず、美しい未踏峰を手に入れることができた。

ラトックⅠ峰（7,145m）

ラトック北稜は、40年間クライマーの頭の片隅を占めてきた。頂上は1979年の日本隊によってビアフォ氷河側から固定ロープを採用して登られたものの、その１年前にアメリカのジム・ドニーニ、ジョージ・ロウ、ジェフ・ロウ、マイケル・ケネディが26日間のカプセル・スタイルで北稜に挑戦、頂上まで150m以内に迫っていた。以来30回以上挑戦されたが、そこまで登った隊はなく、北稜はカラコルム最高の課題と評価されてきた。

スロヴェニアのアレシュ・チェセン、ルカ・ストラジャールと英国のトム・リヴィングストンが北稜中段から北西壁を登ってⅡ峰（7,108m）とのコルに到達、南面をトラバースして８月９日頂上に立ち、第２登に成功した。一時は北稜完登とも報道されたが、上記ルートへ迂回したことが判明。北稜そのも

のを登るという夢は残された。

この成功にさきだつ７月中旬、ロシアのアレクサンドル・グーコフとセルゲイ・グラズノフも北稜に挑んだ。グーコフは前年700mまで登っていたが、今回はグラズノフが７月23日に6,975mに達した。しかし、天候悪化で引き返す途中グラズノフが転落死、グーコフは6,200m地点に取り残され、パキスタン陸軍ヘリが26日から捜索に飛んでグーコフの居場所を特定、31日に無事救助された。

ルプガール・サール西峰（7,181m）

オーストリアのハンスイェルク・アウアー（34）が西壁を単独初登攀した。クンヤン・チッシュ東峰（2013年）、ニルギリ南峰南東壁（15年）、トゥインズ東峰北壁（16年）などをチームで登ってきたアウアーは、高所での単独登攀を試そうと対象を物色していた。東西に長い頂稜に約7200mの頂を３つ連ねるルプガール・サールは、1979年に西ドイツ隊が南西稜から西峰に初登頂、同年法政大学隊がそれを越えて中央峰に登っていたが、バリエーションの記録は見当たらない。

4,500m地点にBCを設けたアウアーは、南西稜を6,000mまで３日間かけて往復して順応を図ると、西壁へのアプローチを確認してからBC で短い悪天候をやり過ごし、７月６日に出発した。西壁基部に見つけておいたビバーク地（6,200m）まで７時間半。ここで一泊した翌朝５時に出発し、西壁の左寄りをたどって北西稜に抜け出した。急峻な稜線には部分的に岩の脆い箇所があったが、11時半には頂上に着いた。下降にかかると、さすがに疲労を感じはじめ、容易な斜面でも気が抜けなかった。西壁の下降では、いちいちアンカーを作ってロープを回収する手間を惜しんでクライムダウンした。懸垂下降したくなるようなところも出てきたが慎重に乗り切り、その夜８時にはBCに帰った。

スンマ・リ（チョクトイ・リ、6,166m）

チョクトイ氷河をはさんでラトック山群と対峙するピークで、同氷河の最高峰。アレックス・フーバー（独）とファビアン・ブールが南西岩稜を初登攀、The Big Easy（5.10+ A1）と名付けた。アスコーレから４日間でBCを設け、さらに5,000mにABC。岩稜の途中にあるコルから直接氷河に下りられるように200mのフィックス・ロープを施し、中間部の5,500mにビバーク地を設けた。その先の壁にはヨセミテ風のみごとなクラックが食い込んでいたが、嵐の襲来で雪に覆われてしまった。いったんBC に下りて１週間の嵐をやり過ごしてから再開。ロックシューズとクランポンを頻繁に履き替えながらヘッドウォールを登って前衛峰に到達。いったん懸垂下降してから最高点まで登り詰めた。

2－4　アルプス

モン・ブラン山群

スイスのダニ・アーノルト（34）が７月27日、グランド・ジョラス北壁ウォーカー側稜のカシン・ルートを新記録の２時間４分で登りきった。アルプス三大北壁のスピード登攀を目指しているアーノルトは、すでにマッターホルンで１時間46分の記録を持っているが、アイガーでは故・ウエリ・シュテックの７時間22分７秒を破れずにいる。今後の目標はまずアイガーでシュテックの記録を破ること、さらにグランド・ジョラスの２時間切りということになるだろう。

ベルナー・オーバーラント

ドイツのロベルト・ヤスパーが、ブライトヴァングフルーのフライング・サーカスを２月24日にロー

プソロした。1998年に妻のダニエラをパートナーとして拓いた４ピッチのミックスルートで、世界初のM10として評判を呼んだもの。

バルバラ・ツァンガールとヤーコポ・ラルヒャーがアイガー北壁のOdyssee（8a＋/5.13c）を８月中旬に４日間で登った。1,400m、33ピッチのこのルートは2015年にロジェ・シェーリとロベルト・ヤスパー、ジーモン・ギートルによって拓かれたもので、今回が第２登。二人は難しいピッチのみそれぞれレッドポイントし、易しいピッチでは交替でリードした。この再登にさきだって二人はアイガー北壁のテストピース、Magic Mushroom（5.13a, 250m）とDeep Blue Sea（5.12c,250m）も登っている。

シェーリは８月に自身３本目のルートAirplane Mode（300m、8a+）を拓いた。２シーズンにわたって登ったもので、パートナーはディミトリ・フォークト、ベルント・ラートマイア、メイヤン・スミス＝ゴバト。ディープブルーシーの右にあたり、ジュネーブピラーのバルジをたどる。

2−5　アラスカ/カナダ

デナリ（6,194m）

米国女性ペア、シャンテル・アストーガとアン・ギルバート・チェースが困難で知られる南壁Slovak Direct（2,740m、5.9 X M6 WI6+）の女性初登に成功した。通算でも第９登に該当する。６月２日に登りはじめ５日に完登した。二人は前年秋にガルワールのニルカンタ南西壁を初登攀し、ピオレドール特別表彰を受けた。アストーガは2015年にジュウェル・ルンドとDenali Diamond（2,370m、5.9 A3/M6 A1 WI5+）の女性初登にも成功していた。

彼女らが頂上に着いた日、コリン・ヘイリーはカシン・リッジのスピードソロに挑んで８時間７分で完登した。2011年にジョン・グリフィスとウィル・シム（英）が樹立した記録14時間40分を半分近くに短縮したことになる。

メンデンホール岩塔群

この数年、カナダからパタゴニアまで目覚ましい活躍を示してきたマルク＝アンドレ・ルクレール（25、カナダ）が３月５日、メインタワー北壁の新ルートに成功後、行方不明になった。ジョージ（通称ライアン）・ジョンソン（34）と初登攀に成功した旨をインスタグラムで発信した直後に連絡が取れなくなったもの。捜索隊は、彼らが下降路に使った第４タワーのクーロワールで、クレバスに垂れている２本のロープを視認、また下山のために二人が残したザックやスキーなどのデポ品も発見したが、雪崩の危険があるためクーロワールには立ち入らなかった。クレバスの縁にロープがアンカーされていたということは、雪崩か転落か、そこで事故が起こったことを示していると思われる。

レヴェレーション山群

４月初め、英国のトム・リヴィングストンとウィスディーン・ホーソンがジェゼベル（2,880m）東壁に新ルートを拓いた。当初未踏の北壁（1,200m）を狙ったが、８ピッチ目を過ぎて張り出した雪のマッシュルームに阻まれた。他の可能性を求めた彼らは東壁に注目。2015年にピート・グレアムとベン・シルヴェスターが登ったHoar of Babylon左手のラインを狙うことにした。４月６日、一部同時登攀を交えて10ピッチで東稜に抜け、200m行くと頂上岩塔下の快適なビバーク地に出た。翌日12時30分、無風快晴の下、北東峰の頂上に登り詰めた。

マウント・ブレイン

ブレット・ハリントンが４月、ニュージーランド

のローズ・ピアソンと、ロッキーのブレイン西壁に新ルートを拓いた。早朝４時半にキャンモアを出た二人は６時にアプローチを開始、10時ごろテクニカルなクライミングが始まる地点に着いた。ルートは急峻な雪と不安定な岩およびミックスで構成されていたが、大部分を同時登攀で進み、夜８時半ごろ、テクニカルな数ピッチを登ると頂上に出た。下降ルートは複雑で、ナイフエッジの稜線と雪庇で苦労。最後は稜線を離れて70mの懸垂３回でガリーに下り、雪の上をクライムダウンした。車に戻ったのは朝の４時だった。ルートの３分の２は新しいが、上部はスロウィンスキーが夏に拓いたラインの近くを通っている。980mのルート中に残置されたプロテクションはなかったが、懸垂下降の支点にはスリング１本とナッツ２個、アングルピトン１本が残されていた。ルート名はLife Compass（Ⅳ　5.10a　M4+）。

キャッスル・マウンテン

サーシャ・ディジュリアンとマイク・ドイルが、キャッスル・マウンテンのマルチピッチ、War Hammer（5.14）を第２登した。このルートは、６ピッチのCastles in the Sky（5.14a）の前後に易しい10ピッチをリンクしたもので、ソニー・トロッター初登によるカナディアン・ロッキー三部作のひとつに数えられている。ディジュリアンは８月１日、その三部作のもうひとつに当たる、マウント・ルイーズ東壁のThe Shining（5.13+ 15ピッチ）も手中にした。

ヤムナスカ

ディジュリアンが８月、Blue Jeans Direct（5.14a、７ピッチ）を第２登した。ソニー・トロッターが2017年に完登したカナディアン・ロッキー三部作のひとつに当たり、先に成功していた二つと合わせ、三部作の全制覇を成し遂げた。完登に要した期間は約５週間。トロッターに次ぐ２人目の成功で、各ルートとも女性初登となった。

2－6　アメリカ

ヨセミテ渓谷

アレックス・オノルドとトミー・コールドウェルが６月６日、エル・キャピタン、ノーズの最速記録を更新した。タイムは１時間58分７秒で、ついに２時間を切る大記録が樹立された。これに先立つ５月30日、二人は２時間10分15秒で登り、ジム・レイノルズとブラッド・ゴーブライトが前年10月に出した記録を９分30秒も縮めた。次の目標を２時間以内と定めた二人はトライを続行。２日前の６月４日には、２時間１分50秒のタイムを出し、２時間切りは時間の問題と考えられていた。

今シーズンは、ノーズ以外のルートでもスピード記録がいくつか塗り替えられた。ロジャー・パトナムとブランドン・アダムスが５月に、シールド（5.8 A3 30ピッチ）を８時間55分で登った。それまでの最短記録はシダー・ライトとクリス・マクナマラが99年に出した10時間58分だった。

サラテでは女性による新記録が出た。ジョシー・マッキーとダイアナ・ヴェントによる16時間24分で、３年前のリビー・ソーターとアリックス・モリスの約18時間半を２時間以上更新した。

また、デイヴィッド・オルフリーが６月２日、ゾディアックのスピードソロ記録を更新。さまざまなソロシステムを駆使しながら10時間52分50秒で単独登攀した。

イタリアのヤーコポ・ラルヒャーとオーストリア女性バルバラ・ツァンガールが12月上旬、マジック・マッシュルーム（5.14a、30ピッチ）の第３登に成功した。5.12と5.13がそれぞれ９ピッチ、5.14aが

２ピッチあり、ドーンウォールに次いで高難度ピッチの連続するビッグウォールフリー・ルート。合計28日間を費やし、最終的に８日間のシングル・プッシュで、全ピッチをフリーで登った。

ベルギーのニコラ・ファブレスとジーベ・ヴァンヘーがエル・コラソン（5.13b、35ピッチ）を４日間のシングル・プッシュで再登した。ファブレスはその後、リボンフォールにオールフリーの新ルート、Eye of Sauron（5.13a/b、8ピッチ 400m）を拓いた。ルート中盤の巨大ルーフが核心で、立体的なムーヴを強いられる。グラウンドアップによるシングル・プッシュでの開拓で、ボルトは使わず、トラッドギアだけで登っている。

2−7 パタゴニア

アグハ・デスモチャダ

パイネ山群のマスカラとオハの両岩峰にはさまれたピーク。ベルギーのジーベ・ヴァンヘーとセアン・ヴィラヌーヴァ・オドリスコルが３月30日の短い好天期間をとらえて東壁に新ルートを拓いた。パイネ岩塔群からくるアセンシオ谷とフランセス谷に平行するバデル谷からアプローチし、500m13ピッチのルートを、オールフリーの12時間で登りきった。ルート名はEl Matador（6ｃ）。

セロ・アルミランテ・ニエト（2,670m）

パイネ・チコの東にあるピーク。チリのフェリペ・ビシャラ（27）とクリスチャン・バーラ・ムニョス（30）が８月12日に未踏の南東壁を登った。右斜上するランペを10ピッチにわたってたどり、最後は急峻なミックス部と不安定な雪壁を８ピッチ登るラインで、29時間を要して午前２時に登頂し、２時間半の下降で朝７時取付きに戻った。標高差1,300mに及ぶルートはLinea de Libertadと名付けられた。

セロ・リソ・パトロン南峰（2,350m）

南氷陸の西端にそびえる山群。イタリアのマッテオ・デッラ・ボルデッラ（35）はスイスのシルヴァン・シュープバッハと２月から３月の22日間にこの僻遠の地を訪れ、新ルートを拓いて南峰に初登頂した。中央峰（2,550m）は1988年のフェラーリ隊が初登頂している。

２月７日にプエルト・ナタレスを出た二人は３日後、プエルト・エデンから30日分の物資と全装備を積んだカヤックを漕いでフィヨルド・ファルコンを100kmアプローチしたところが、BC予定地に着いてみると、荒れた砂浜に倒木と氷のブロックが散らばり、魚介類の死骸も随所に見られた。最近津波が襲ったためらしい。水面上10mの高さにロープを張って氷河湖を渡るなど苦労して進み、15日には南峰西壁の取付きまで１時間半の地点にABCを設けた。嵐で停滞する間に西壁はすっかり雪におおわれてしまった。２月22日、出だしの300mは適度な難しさだったが、25mにわたって急峻な岩場となり、１時間かけてこの核心をドライツーリングで越える。その先はミックス壁、急峻なランペ、90度の氷雪癖となった。頂上に抜けたのは午後８時半。頂上マッシュルームに掘った雪洞でビバークし、翌早朝下降に移った。ルート名はKing Kong（900m M7＋90度）。

トーレス・デル・アベジャーノ

ウィル・シム、ジョン・クルック、ポール・スウェイル、ジョン・マッキューン、ルース・ビーヴァンの英国チームが南タワー東壁を初めとするいくつかの登攀に成功した。チリ入国からBCまでは10日間かかった。南米第２の湖、ラーゴ・ヘネラル・カレラから土地のガウチョとその馬と共に５日間歩き、悪路で馬が進めなくなってから２、３日はリレーし

て荷を運んだ。12月の悪天候が去ると、壁がまだ濡れているなか、前回のラインにしたがって中ほどまで固定ロープを設置した。BCを護るビーヴァンを除く４人を二つのペアに分けて夜明けと共にヘッドウォールの登攀を開始。その日の午後には頂上に立った。ルートは900から1,000m、すべてのピッチがE5までのフリーで登られた。

2－8　南極大陸とその周辺

ピリットヒルズ山脈

１月11日から20日、ジャン=イヴ・イゴネン隊長ら６人のフランスGMHM隊が南極大陸最深部の山脈を訪れ、マウント・ティッド（2,244m）、マウント・トゥコット（1,950m）などで一連の初登攀を行なった。南極点から離れること９度の位置にあるこのヌナタック群には学術調査隊しか入ったことがなく、登攀を目的として訪れたのは初めてである。メンバーは隊長以下アルノー・ベーヨ、アントワーヌ・ブレトン、ディディエ・ジュルダン、セバスチャン・モアッティ、ディミトリ・ミュノー。未踏の岩峰群に取りまかれた氷帽にBCを定めた一行は、翌日からそれぞれの獲物に取りかかった。

ベーヨ、ミュノー、ジュルダンは未踏のトゥコットに向かい、１月12日Corrason（600m、TD　5c）から初登頂。傾斜40度の氷雪癖だった。同日、ブレトンとモアッティは最高峰のティッドを目指し、北壁に食い込む氷のガリーを登ってComing in from the cold（800m、TD　WI4 M4）とした。続く数日の気温は零下20度まで下がったが、ベーヨとミュノーは15日にティッド北壁でArdi（800m、D）を初登。同日ブレトン、ジュルダン、モアッティはマウント・グッドウィン（2,181m）北東ガリーにThree Little Birds（700m、TD　WI4　M4）を拓いた。18日にはブレトンとモアッティがトゥコット北壁で70度の氷雪癖Paradis Blancs（450ｎ、D+）を登った。